

『幻となった壮大なイベント』から

Thoughts from “Unaccomplished Huge Event”

岩淵 恵¹

IWABUCHI Megumi

Abstract: After a long distracted period caused by the death of my parents last year, I received “The Bulletin of the International Society for Harmonization of Cultures & Civilizations No 20” There was an essay by Horigami Ken, titled “Unaccomplished Huge Event”. Reading this essay was for me something like stretching unused muscles and exercised my brain to recall sensitive images that presented me a feeling of great empathy which in turn led my thoughts to an image of my passed parents and then to that of a disappeared painting. Those sensitive memories compelled me to write this essay.

このごろようやく自分の時間ができて、ちょうど送られてきた『融合文化研究』誌に「さあ戻ってこいよ」と言われているようで、ほんのちょっと読んでみた。けれどここ数年の施設ぐらしで頭のさびつきはいかんともしがたく、やっと『幻の……』というエッセイを読んでみた。

たちまち、「読みながら別のことを想起させる」という頭の中の感性の体操がはじまり、考えが一段落すると何ともいい感じである。ちょうど使わない筋肉をストレッチで伸ばした後のようだった。

さて、その想起というのは、何年か前の修士課程²で最初のころ読んだインモースという人の『消えた泉』という研究エッセイである。大きな時間の流れでサーフィンしたような快よいエッセイだった。

この事から私は、一人のフランス人を知った。ノエル・ペリ。名門リヨン大学を経て司祭となり明治半ば来日した。初め松本、次いで水戸に赴任する³。水戸にたつ前に東京でみた能に感銘をうけ、ついに司祭をやめベトナムのハノイに移り、語学教師をしながら研究にいそむ。そしてたまたま日本に渡ってきては能をみてはまたハノイで研究しレポートなど書き、それを友人たちに送る。この生活は大正十一年まで続いた。というのはペリがハノイで交通事故で落命したからである。

ペリの友人たちは彼の死を惜しみ、昭和 19 年東京日仏会館からノエル・ペリ著『能』が出

1 入力者（菊地）注。著者は病床で闘病中のところ、無理を押しして原稿用紙に原稿を書き投稿されたものである。電子ファイル化にあたり編集部の菊地が入力した。

2 入力者注。原文では「…修士 で最初のころ…」のところ、「課程」を補った。著者は 2002 年から 2004 年にかけて日本大学大学院総合社会情報研究科修士課程で学んでいる。

3 入力者注。原文では「…水戸に任する」のところ、「赴任する」と補った。

された。

ところで「消えた泉」とは何をさすのか。戦争で衰えたフランス人の国土や人の心だろうか。

さて、もう一つの想起とは私自身の現在進行形の課題である。それは親の形見になってしまった大沢⁴の自宅にあった生物画であるが、プロヴァンスの絵らしくとてもものびのびしている。という印象の明るい絵だった。

気になったのは「T. シューファー」というサインである。あのノエル・ペリ⁵の後継者⁶とされるフランスの、ドナルド・キーンのような日本文化研究者ではないだろうか。画家T. シューファーと学者R. シーフェール（つづりは同じ）、読み方が違うのは字だけ読んだか発音に忠実かによる。つづりは同じなので、もし「シフェール」という家名だったら、T. シフェールという画家は高名な日本文化研究者R. シフェールの身内となる。

そういえば、ふと気がついた⁷ことがあった。この絵は20世紀初頭フランスにおこった「ジャポニズム」の末えいなのではないだろうか。先世紀のジャポニズムのマネの『笛をふく少年』のように影のない、二次元的世界に突如現れた静物は、平面の上に背景がら浮きあがっているようにみえる。

この『ヌーベル・ジャポニズム』といってもよい作品を齢80にして描きあげた画家は千九〇〇年ころの生まれという。ならばサンテグジュペリもパリの画学校にいたというから、どこかでだれか（約20名の日本人画家がいたという。その一人と）サンテグジュペリが、画学校でリーブル⁷を並べる日本人留学生から『かぐや姫』というむかし話を聞いた。

「サリュエ⁸。面白いおとぎ話だな。『星の王女』だな。センセーショナルな題じゃないか」

「おまえ『星の王子』って書けよ」

「ああ、いつかな」

「楽しみにしてるぞ」

というような会話があったかもしれないのだ。研究の質を落とすかもしれないけれど、想像力を喚起するものが必要なのではないか。

これからしばらくこの誌にそういうものを送りたいと思う。

4 入力者注。山形県米沢市大沢であろうか。

5 入力者注。原文は「後者」と間が空白のところ、「後継者」と補った。

6 入力者注。原文は「と気がついた」のところ、「ふと気がついた」と補った。

7 入力者注。リーブルは仏語 livre（本の意）であろう。

8 入力者注。サリュエは仏語 Salue!（はあい、とか、またね、の意）であろう。